

六月度読者の集い（木鶏本部例会）は二十一日（土）、糀屋本店の浅利妙峰氏を講師にお招きし、今春出版された『浅利妙峰の母になるとき読む本』の出版記念講演会として東京・京王プラザホテルにて開催されました。五人の子供を立派に育て上げた「日本の母」に、子供が真つすぐ育つ秘訣を語っていただきました（参加者九十三名）。

六月度読者の集い

次世代へ命のたすきをつなぐ

糀屋本店 浅利妙峰



子育てに悩むお母さんたち

浅利家が分厚佐伯の地で糀屋を始めしたのは元禄二（一六八九）年のこと。以来、三百年以上にわたって、糀を造り続けてきたわけですが、近年急速に進む核家族化や食生活の変化には抗えず、糀の需要は年々減っていき、経営状況は厳しさを増すばかりでした。

しかし、長きにわたり日本の食生活を支えてきた糀をこのまま衰退させてしまいうわけにはいかない、との思いを抑えきれなくなった私は二〇〇七年、一念発起して跡を継ぐと言ってくれた息子とともに、糀の新たな可能性を探る取り組みを

始めたのでした。そして、試行錯誤の中で辿り着いたのが、豊富な消化酵素が含まれている糀を「調味料」として用いる「塩糀」のアイデアだったのです。

HPなどでその効能やレシピを発信していくうちに、塩糀は多くの食卓で親しまれるようになり、約二億円だった糀の市場規模は、いまや六十二億円市場にまで急拡大。それに伴って、私の生活も一変し、料理の講習会や講演で全国各地に足を運ぶことが多くなりました。

ではなぜ、そんな私が子育てのお話をさせていたのか。それは、糀を広めるために各地を訪ねる中で、子育てに悩むお母さんたちが想像以上にたくさんいるという現実と直面したからでした。

そうした出逢いを通じて、子育てに悩んでいるお母さんたちの一助になればと、私自身の子育ての経験をお話ししようと思うに至ったわけですね。

かくいう私も糀屋の経営が苦しい中、二足の草鞋を履いて公文式の先生をしながら多くの育児書を読み、必死の思いで五人の子供たちを育ててきたのです。

いまでは長女は自立し、次女は唐津のお寺に嫁ぎ、長男は海外で糀の普及に尽くす。次男は糀屋を継ぎ、三男は独立し

てコンサルタントとして経営面の助力をしていただいているのですが、我ながら皆本当に立派に育ってくれました。

我が子を賢い子に育てないといけない。多くのお母さんがそのような気持ちで子育てをされているかと思えます。

しかし、「賢い」とは、試験でよい点数を取ることだけを意味するとは限りません。たくさん生徒たちを東京大学に合格させてきた予備校講師の林修先生はこうおっしゃっています。

「親御さんはこの子をいい大学に入れてくださいと頼んでくれますが、三歳から五歳まで、親御さんが自分の子供に何を与えてきたのか、どんな刺激を与えてきたのか、本当はそこで決まるんです」

つまり林先生は、受験に受かるテクニックは教えることはできるけれども、自発的にいろいろなことに興味を抱くことや、好奇心を生活や学習に結びつけていく姿勢を教えることはできないと言っているんですね。そして、そうした実社会で生きる上での基礎的能力の訓練は、子供が三歳から五歳までに行うのが理想なんだと。

最先端の脳生理学でも、人間の脳は三歳までに七十割から八十割ができあがると言われ、さらに脳の基礎的部分は胎児の時に形成されるとの研究もあります。

要するに、つわりが起こって、「何か変だな」という時期から子育ては始まっているということなんです。ですから私も「お腹の中から三歳までが勝負」と思つて、幼

児教育には大変力を入れてきました。とはいえ、幼児教育の大切さは分かっていても、具体的にどうしてよいのかは分からないものです。ここにある興味深い調査結果があります。それは幼児期に読み聞かせなどの外部から豊富な刺激を受けた子と、そうでない子の小学校入学時の獲得語彙数を比べてみると、前者が約六千語で後者が約千五百という違いがあったというものです。そして、その語彙数が、子供の学校の成績に比例していたという結果も出ています。

つまり、語彙数（国語力）がその子の学力を伸ばしているということですね。国語力というのは、他人とのコミュニケーション能力でもありますが、その子が実社会の中で生活していく「生きる力」にも直結していくわけなんです。

私が先生をやっていた公文では、「歌二百、読み聞かせ一万（冊）賢い子」と言ってきました。賢い子にするには、とにかく歌詞の意味が分からなくとも歌を二百覚えさせましょう。本をたくさん読み聞かせてあげましょうということです。

二百の歌を覚えるとは、一緒に歌えるということですが、「うさぎ追いかの山」を「うさぎが美味しかった山」でもいいので、とにかく言葉を覚えさせることが大事です。そして、読み聞かせでは、なるべく「勧善懲悪」のストーリーの絵本を選んでください。幼い頃から「昔々」と寝物語でも話してあげれば、よいこと

といつたことですね。一説には、『教育勸語』があったから、西ドイツは日本よりも早く復興できたとも言われています。

私もまた、『教育勸語』に書いてあるように、世のため人のために生きることこそ、自分の命を輝かせて生きることなのだ、子供が小さい頃から耳が痛くなるぐらいに伝えてきました。自分のことだけでなく、誰かの役に立ちたい」と自ら考え、行動を起こせる習慣が子供の頃に身につけば、実社会に出ても逞しく生きていくことができるはずなんです。

子供が将来どんな職業に就くかは分かりませんが、ちよつとした思いやりで人間関係を良好にしていく。自分のいる場をよりよくするために努力し、最終的には世の中のため人のためになることを進んで実践する人に育ってほしい。そう願っています。私は子供たちに向き合ってきました。そして何より子育てで気をつけたいといけないのは、母親が自分の子は必ずよい子に育つという強い意志と確信を持つことです。やっぱり私の子だから無理だとかダメだとか言つてしまつたらお終いです。子供は親に掛けられた言葉どおりに育つのです。だから、あなたはすごい、さすが私の子供やね、いつも語り掛けてあげること。高校生や中学生でも遅くはありません。あなたは大き器晩成なんだからって言い続けてください（笑）。そうすれば、必ず将来大きな花が咲きますから。

雑誌から～ 幼児期の獲得語彙数が 子どものその後を決めてしまいます。 豊富に良い言葉を与える事が大事です。

をして悪いことはしない、という態度が自然に身につけてきます。また、なぜ絵本かと言えば、主語述語がしっかり整っているからです。綺麗な日本語を幼い頃から聴いていれば、子供は見本のおおりに覚え、話すようになるのです。「学ぶ」という言葉の語源は、「真似ぶ」から来ています。子供は親が真似してほしい部分だけでなく、そうではない部分もしつかりと真似してくれます。だから、

まさに子供は親のコピーなんです。山本五十六閣下に「やってみせ、言つて聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」という言葉がありますが、子育ても同じで、まず何でも親が正しい見本を示してあげることが大切です。

他人を思いやる心を育てる。それから大切なのは、幼い頃から、人を思いやる心、故郷や地域を思う心などを育む教育ですね。先般、福井県に講演

に行つた際にも、そのことの重要性を改めて実感する出来事がありました。福井県の偉人に明治維新で活躍した橋本左内という人がいますが、彼が十五歳の時に書いた「啓発録」には、自分を奮い立たせる五つの行動規範が挙げられています。すなわち「稚心を去れ」「氣を振るえ」「志を立てよ」「学に勉めよ」「交友を択べ」の五つ。そして、福井県内のほとんどの中学校では、いまでも橋本左内の教えを守り、十四歳になる二年生の時に志を立てることの大切さを教える「立志式」を行っているといわれています。私が講演に伺つたのは、保険のトップセールスをされている方々の勉強会でしたが、その懇親会の席で、「なぜ皆さんは保険の仕事を選ばれたのですか」と聞いてみました。すると皆から一様に返ってきたのが、「人の役に立ちたいから」という答えだったんですね。実は福井県は学力とスポーツ、住みやすきでも全国でトップクラスということですが、そのすごさの秘密が分かった瞬間でした。

もう一つ、道徳心の大切さを教えるお話としては、戦後の旧西ドイツの復興があります。当時首相だったアデナウアーは、自分の執務室に日本の『教育勸語』のドイツ語訳を掲げ、皆にその精神を広めていたといわれています。『教育勸語』に書いてあることは、親や祖先を大事にし、まじやう、兄弟は仲良く、夫婦は仲睦まじく、勉学に励み、広く世の中のために尽くす、